

青年期における恋愛相手の選択基準とアイデンティティ発達との関係

立教大学大学院現代心理学研究科 キン イクン

Mate selection standards and identity developmental in adolescence

Jin Yijun (Graduate School of Contemporary Psychology, Rikkyo University)

The author studies the relationship between mate selection standards of Japanese college students and their identity development. The results showed that in selecting mates female college students prefer males' character traits, while male students are concerned about females' appearance characteristics. A Multi Dimensional Scaling reveals an obvious correlation between the difference in males' mate selection standards and that in their identity development. However, such correlation was not found in female college students. On the whole, this study supports the Identity Theory of Erikson.

Key words : mate selection standards, identity development, adolescence.

問題

恋愛は青年期に入った個体にとって重大な課題である。恋愛行動の第一歩——恋愛相手の選択 (mate choice : 以下“選択”と略称する) は恋愛関係の形成、保持あるいは別れの前提条件と考えられる (Stenberg & Barnes, 1988)。選択の問題を巡って数多くの研究が行われ、様々な観点もしくは理論が提出された。例えば、社会心理学において身体的魅力 (Hatfield & Sprecher, 1986; 松井・山本, 1985; 奥田, 1990; Walster, Aronson, Abrahams, & Rottman et al., 1966)、場所と地理上の接近性 (Festinger, Schachter & Back, 1950) と相似性 (Simpson & Harris, 1994) は主な条件として強調されている。さらに近年に注目を浴びる進化心理学は選択について最も独自な見解——性淘汰の論説を主張している (Buss, 1993)。

一方、選択に関する人格心理学における研究は Terman (1938) によって最初に発表された。

Terman (1938) は恋愛と人格特性の関連について検討したが、それ以降様々な研究者によって477篇以上の論文が発表された (Cooper & Sheldon, 2002)。その中で、Rubin (1973) は性格上の“優しさ (warmth)”と“有能感 (competence)”がある人は、そうでない人より他人の好感を得やすいと指摘した。西平 (1981a) は、青年の恋愛に葛藤が生じやすい原因として嫉妬、羞恥、激情、固執、悲哀、感傷などを挙げている。また、男女双方の性格上の相似性と補足性のどちらがより親密関係の達成を促すのかということについての論争が続いている (Byrne, 1971; Hinde, 1997; Klohnen & Mendelsohn, 1998; Luo & Klohnen, 2005; Winch, 1958など)。

このように、人格心理学の分野において各流派は恋愛あるいは選択活動について各自の理論的立場から検討してきた。その中でアイデンティティ発達理論はこの問題に対して次の (a), (b) 2つの点で他の学説以上に貢献できる可能性を持って

いると考えられる。

(a) アイデンティティ発達構成要素と恋愛あるいは選択活動の形成要因との関連——最初に明確にアイデンティティという概念を提出した著作“幼児期と社会”(Erikson, 1950)で人間の行動を正しく理解するため、その人の生物学的特徴、その人独自の心理的欲求・関心や心理的防衛、その人が住む文化環境といった相互影響し合う3つの要素から、全体的に把握しなければならないとEriksonは強調した。

一方、青年期における恋愛あるいは選択活動も、一定の時期(思春期)に入ってから生理的变化とともに始まる活動である(Stenberg & Barroes, 1988)。それによって異性に対する恋が芽生える。同時に他人と交際して孤独感を排除し、一体になる心理的欲求がある(Fromm, 1956)。そして、繁殖するために独立して新たな家庭単位を作ることに対する社会的要求も同時に存在することである。

以上のことから、Erikson理論により恋愛あるいは選択活動を分析すればより全面的に説得力のある見解が得られると考えられる。

(b) 漸成発達理論から恋愛行動を考察する意味——Erikson(1968)は発達に関する8段階のライフ・サイクル図式を提示し、生涯のそれぞれの段階で解決を要する重要な心理社会的課題を示している。特に第6段階“親密性 対 孤独”では、専ら恋愛のことについて焦点をあてて論証した。さらにその時期だけではなく、親密性の形成経緯について最初の段階から全般的に説明した。他の人格理論が恋愛関係における二人の性格の異同しか論じないことに比べ、漸成発達理論はもっと深く検討していると考えられる。

アイデンティティ発達と選択活動との関連について若干の研究が既に行なわれてきた。Tesch & Whitbourne(1982)は48名の男性と44名の女性を調査対象として、職業、宗教、政治観点と性役割におけるアイデンティティの形成状況と親密性の達成状態を測定した。また、両者の相関と性差を分析した。結果はEriksonの理論をほとんど支持

したが、職業アイデンティティの性差はみられなかった。つまりアイデンティティの形成がより発達している人ほど親密性の達成状態がよいのである。Sanderson & Cantor(1995)は2つの研究を通して青年男女の交際する目的(親密関係を求める目的と自信・自我探求の目的)とアイデンティティの形成とが関連することをあきらかにした。結果によるとアイデンティティ統合あるいは早期完了の状態の人はより親密関係(親密性)を求めるために交際する。それに対してアイデンティティ拡散あるいはモラトリアムの状態の人はより自信・自我探求(アイデンティティ)のために異性と交際する。また、前者は付き合う相手の人数が少なく関係が安定しており、後者は相手の人数が多くてパターンも多様であり、関係も不安定である。この結果もEriksonの理論と一致することが示された。Zimmer-Gembeck & Petherick(2006)は、242人を調査して恋愛関係への満足度、デートの目的と職業アイデンティティ、性役割アイデンティティとの相関を検討した。結果はSanderson & Cantor(1995)の研究結果と同じくEriksonの理論を支持した。

さらに大野(1995)は十数年間に収集した受講生のレポートを質的研究手法でErikson理論を用いた分析を行い、“アイデンティティのための恋愛”という知見を提出した。例えば、恋愛関係における不安と回避の傾向という現象に対して、“自分のアイデンティティの同一性と連続性を失うことへの恐れ”であると洞察した。

上述したことを統合して考察すると、恋愛行動はアイデンティティ発達の状況を反映していると考えられる。

一方、人間は社会的生物として覚醒した時間の殆どは他者と交際しているうちに過ごすものである。誰でも自分自身の中に様々な人々の様々な関係を抱えている(Mead, 1934)。それゆえ、個人の価値観、行動様態もしくはアイデンティティはみなその人を取り巻く社会的文脈の産物である。しかもある特有な社会文化の文脈において、その文脈にいる成員みんなに認められた選択基準が存

在していると考えられる。この問題についてもいくつかの研究がある (Fletcher & Simpson, 1999; Regan, 1998など)。Fletcher & Simpson (1999) の研究では、恋愛基準とその柔軟性が関係性の質にどのように関連しているかを検討した。個人が、暖かさ- 頼もしさ、活発さ- 魅力、地位- 器量の3つの次元において、自分自身と理想の恋愛相手を評定した。その後、各次元で、彼らの理想がどのくらい柔軟か、現在の恋愛相手がどのくらい理想と一致しているかを評定した。各次元で自分を高く評定した人は、柔軟性に欠く理想基準をもち、パートナーが理想に合致するほど、関係性の質を高く評定した。Howard, Philip, & Pepper (1987) の研究によって、女性は恋愛相手の選択活動を通して自分の社会的パワーの欠如を補うために、社会能力、経済力を重視している。一方、男性は自分にいい生活環境、食事を提供してもらうため、相手の女性の家事技能を重要な条件として考えていることが示された。

しかしながら、人が社会文化での役割を果たす上で恋愛に対する共通した選択基準の枠組みと同時に、恋愛相手を選択する際の個人的な選択傾向が存在すると考えられる。これは個人の生育環境、同化された価値観、人格特徴などと緊密なかかわりがある。例えばCampbell, Foster, & Finkel (2002) は自己愛の傾向がある人の恋愛活動の特徴を分析した。5つの研究から自己愛の人のラブスタイルを明らかにした。結果に示されたように自己愛の傾向がある人はルダスタイプと有意な相関があって恋愛をゲームのように楽しむことと捕らえ、相手に責任感が薄くて忠実感が少ない。Zayas & Shoda (2007) は65人の女子大学生と93人の男子大学生を研究対象として、親密関係において過去に心理的虐待を受けた経験と恋愛相手を再選択する際の選択傾向を研究した。予想に反して被虐待経験ある女性はまた心理的虐待の傾向の男性を選んだ。Simpson & Gangestad (1992) は252名の大学生を調査して社会- 性的オリエンテーション (sociosexual orientation) と選択傾向との関係を検討した。結果は社会- 性的オリエンテ

ーションにおいて要求が厳しい人が人格- 養育能力のような選択基準を重視して、そうではない人が身体的魅力- 社会知名度のような選択基準を大事にしていることを明らかにした。更に選択基準は選択する時の状況によっても変化が起こる。

Regan (1998) は32名の男子大学生と40名の女子大学生を調査対象として選択基準と選択時の状況との関係を検討した。結果として男性も女性も偶然に会ったパートナーに対しては身体的、外的な要求が高いが、一方、結婚するつもりがあるパートナーには人格的なものをもっと要求した。また伝記研究によって、同じような生育環境においてもその個人や状況により、青年期および成人期における恋愛に関する行動や表現に大きな違いが見られることが明らかにされた (三好, 2004, 2006; 茂垣, 2006; 西平, 1981b, 1983, 1990, 1996, 2004; 大野, 1995, 1996; 内島, 2006)。

先述したアイデンティティの発達について、Erikson (1968) はアイデンティティの形成そのものは一生涯続くものだが、その基本的な確立は子ども時代の最終段階である青年期に達成されるべき心理社会的な主題だとした。その最大の契機となるのが思春期において身体内部で必然的に生じる第二性徴による身体的変化と、性衝動への気づきであり、それが自己の身体イメージを不安定にし、自己の内的な連続性や不変性をも脅かし、自己意識の混乱や動揺を引き起こすことになる。これが“自分で自分が分からない”というようなアイデンティティ拡散の危機をもたらす。この危機の中で、自分自身を見つめ自問自答しながら、“自分は何者か”、“自分はこれからどうなるのか”といった問いに対して自分なりの回答を見つけようと模索し、悪戦苦闘する。つまり、真の自分を見出し、自分の生き方を見つけるという、心理社会的な課題に関わるさまざまな葛藤を経験しながらアイデンティティを確立することになる。この確立の過程中、同時に起きる恋愛活動においてもその確立の差異が反映されると思われる。つまり選択傾向における個人差を通して、人格発達特にアイデンティティ発達の差異を読み取ること

ができるようである。したがって本研究では、選択傾向とアイデンティティ発達の各段階における発達との関連について検討する。

目的

本研究の目的は、(a) 日本の男女青年の恋愛相手の選択基準を明らかにする、(b) 選択基準の中に潜在している構成因子を解析して、選択傾向を見出す、(c) 選択の傾向が違う青年のアイデンティティ発達の各段階における発達状態を比較して、差異を検討することである。

方法

第1回目の調査

対象者は首都圏4年制大学大学生104名であった。男性22名(平均年齢20.21歳, $SD=1.10$)、女性82名(平均年齢19.97歳, $SD=.96$)。

質問“あなたは、恋愛相手を選択する場合には、どのような特徴を持っている相手がよいと思いますか?”に対して、自由記述で回答を求めた。

第2回目の調査

対象者は首都圏4年制大学大学生132名であった。男性71名(その中の3名の質問紙が無効になった)、平均年齢20.29歳($SD=.89$)、女性61名、平均年齢20.18歳($SD=1.20$)。

第1回目の調査結果から作成した“恋愛相手の選択する選好度”質問紙(二者択一式)とESDS(Erikson and Social-Desirability Scale)の日本語短縮版(S-ESDS:三好・大野久・内島・若原・大野千里, 2003)を共に実施した。

“恋愛相手の選択する選好度”質問紙とは、恋愛相手を選択する時に2つの項目の中で、より重視している項目を選ぶというものであり、対象者の選択基準の選好度を調べるための質問紙である。質問紙の作成手順としてはまず、第1回目の調査結果から整理して恋愛相手の選択基準として挙げられた頻度の多い順によって、“恋愛相手の選択基準”の順位を決める(Table 1参照)。その順位の中から2項目ずつ抽出し、AとBの2つの選択肢として並べた(岡太・今泉, 1994)。本研究の第1回目の調査結果からは10位までの選択基準

が得られたので、“恋愛相手の選択する選好度”質問紙は45の組み合わせによって構成されている。なお教示は“あなたが恋愛相手を選択する場合、並んでいるAとBの項目のうちより重要だと思う項目に○印をつけてください”とした。

S-ESDS(三好他, 2003)とは、Ochse & Plug(1986)がEriksonの漸成発達理論を基として作成した英語版質問紙の日本語短縮版である。S-ESDSは漸成発達理論の各段階につき7項目、全49項目で構成されており、信頼性、妥当性ともに高い質問紙である。

統計分析方法

多次元尺度構成法(MDS: Multi Dimensional Scaling)を用いた。

結果

選択基準

第1回目の調査(自由記述)によって得られたデータを男女に分けて分析を行った。なお、分析は心理学専攻の大学院生3名によって行われた。青年男性、女性それぞれにおいて、恋愛相手の選択基準として挙げられた頻度の多い順に、10位までをTable 1に示した。

結果から見ると、今回の調査対象者は男女いずれも外観のことを非常に重要な選択基準としていることが分かった。また、性格のやさしさも重要な選択基準だと男女両方において認められた。松井・山本(1985)は、80年代の男性大学生の選択基準をまとめて主に4つの因子を示した。

“1. 家庭的印象”, “2. 外見的美しさ”, “3. 活発さ”, “4. しっかりさ”である。本研究の結果と比べると、外見的、家庭的という選択基準がまだ重視されており、この2つの選択基準の安定性が示された。これは社会文化上の固有観念だと考えられる。しかし、今回の調査結果によって男性の選択基準において、“笑顔が魅力的な人(4位)”, “話して楽しい(8位)”, “一緒にいてリラックスできること(9位)”のような“楽しさ”と見られる選択基準も目立っている。現代男性青年は二人が一緒にいる時の雰囲気も重

Table 1
恋愛相手の選択基準10位までの結果

	男 性	女 性
1	顔がかわいい (10)	背が自分より高い (40)
2	性格が優しい (8)	優しい (35)
3	背が自分より低い (7)	思いやりがある (29)
4	笑うと魅力的な人 (6)	スポーツができる (27)
5	明るい性格 (6)	価値観が同じ (26)
6	精神的自立している (5)	顔がかっこいい (23)
7	共通の興味がある人 (5)	友達も家族も大切にする人 (21)
8	話して面白い, 楽しい (5)	頭がいい, 賢い (20)
9	一緒にリラックスできること (5)	何か一生懸命頑張っている (17)
10	家事ができる (5)	誠実, 真面目な人 (17)

注：()内は挙げられた頻度

視しており、恋愛相手と一緒にいることで自分が楽しいということも大切だと判断していることが明らかになった。

多次元尺度構成法による分析結果

多次元尺度構成法を利用して、第2回目調査“恋愛相手の選択する選好度”質問紙で収集したデータを分析した。次元空間を決める要素——布置の解釈可能性、ストレスの大きさ、何種類かの

初期布置をもちいるなど(岡太・今泉, 1994)、総合的に検討した上で、男性と女性の選択基準の布置空間は2次元空間とした。選択基準の2次元空間布置はFigure 1(男性)とFigure 2(女性)に示した。Figure 1の男性の選択基準の布置では、次元1(水平軸)の左端は“性格が優しい”(第2位)、“話していて面白い”(第8位)、“一緒にいてリラックスできる”(第9位)があるので、

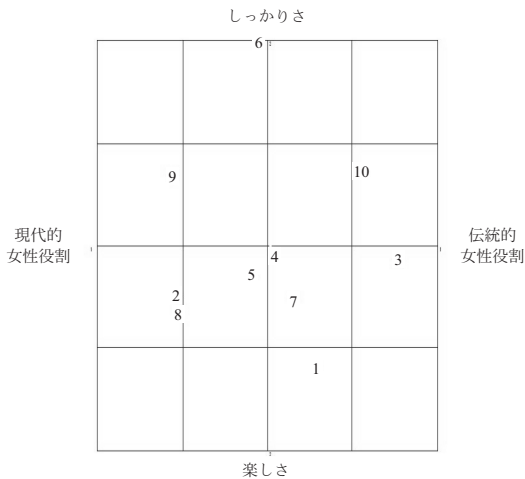


Figure 1. 選択基準の2次元空間布置 (男性)

注：男性選択基準

- | | |
|-------------|--------------------|
| 1. 顔が可愛い | 6. 精神的に自立している |
| 2. 性格が優しい | 7. 共通の趣味がある人 |
| 3. 背が自分より低い | 8. 話していて面白い, 楽しい |
| 4. 笑うと魅力的な人 | 9. 一緒にいてリラックスできること |
| 5. 明るい性格 | 10. 家事ができる |

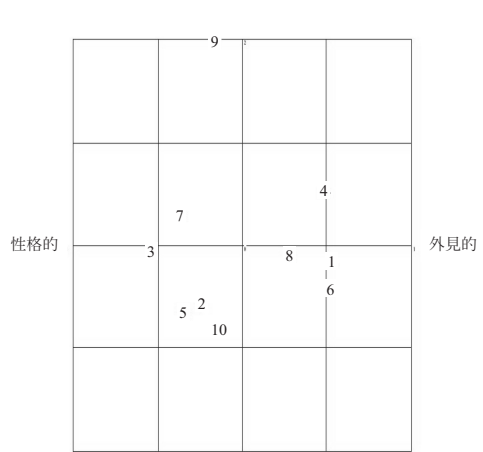


Figure 2. 選択基準の2次元空間布置 (女性)

注：女性選択基準

- | | |
|-------------|----------------------|
| 1. 背が自分より高い | 6. 顔がかっこいい |
| 2. 優しい | 7. 友達も, 家族も大切にする人 |
| 3. 思いやりがある | 8. 頭がいい (賢い) |
| 4. スポーツが出来る | 9. 何か一生懸命頑張っている, 努力家 |
| 5. 価値観が同じ | 10. 誠実, 真面目な人 |

恋愛相手と一緒に楽しむという共有、平等な感じが強いだろう。右端は“背が自分より低い”（第3位），“家事ができる”（第10位）があるので、伝統的な男女役割を読み取ることができるだろう。それ故、次元1は“現代的女性役割 対 伝統的女性役割”と命名した。一方、次元2（垂直軸）の上端は“精神的に自立している”（第6位）が最上端にあるので、恋愛相手のしっかりさが要求されることに対して、下端は“顔が可愛い”（第1位）が最下端にあるので、恋愛相手の外見的楽しさを重視していると考えられる。そのため次元2は“楽しさ 対 しっかりさ”と名をつけた。

Figure 2の女性の選択基準の布置では、次元1（水平軸）の左端は“思いやりがある”（第3位），“価値観が同じ”（第5位），“友たちも家族も大切に”（第7位），“優しい”（第2位）があり、性格の優しさが要求されている。それに対して右端は“背が自分より高い”（第1位），“スポーツができる”（第4位）があるので外見的、生得的な基準だと考えられる。そのため次元1は“性格的 対 外見的”と命名した。次元2では上端に“何か一生懸命頑張っている”（第9位）があるが、下端の方に“誠実、真面目な人”がある。上、下端の選択基準はほとんど同じであるので、この次元は因子構造における意味がないと推定できる。すなわち女性の選択基準は性格か外見かという1次元だと考えられる。しかし対象者の分布を分析

しやすいように、次元2を除去しないで保留することにした。

Figure 3は男性の2次元（“現代的女性役割 対 伝統的女性役割”と“楽しさ 対 しっかりさ”）空間の分布である。Figure 3に示したように、男性は次元1において左端に集中している。すなわち今回の調査における男性対象者は、“伝統的女性役割”より“現代的女性役割”を選択する傾向が強かった。しかし次元2において差異がみられる。“楽しさ”より“しっかりさ”を重視するグループと、“しっかりさ”より“楽しさ”を大事にするグループの存在が明らかになった。

Figure 4は女性の2次元空間の分布である。女性は次元1“性格的 対 外見的”においてみんな左端に集中している。即ち今回の調査における女性対象者は、恋愛相手を選択する際に“外見的”という基準より“性格的”な優しさや思いやりを重視する傾向が強かった。

漸成発達各段階得点の比較

選択基準において選好度が違うことに関する人格上の原因を探る為に、選択基準が違う調査対象者の間で漸成発達各段階の得点を比較した。まず調査対象者を分類する。Figure 3の左上区域に分布している調査対象者、つまり“楽しさ”より“しっかりさ”をより重視している31名の男性はグループ1と命名して、左下区域に分布している調査対象者、つまり“楽しさ”をより大事にして

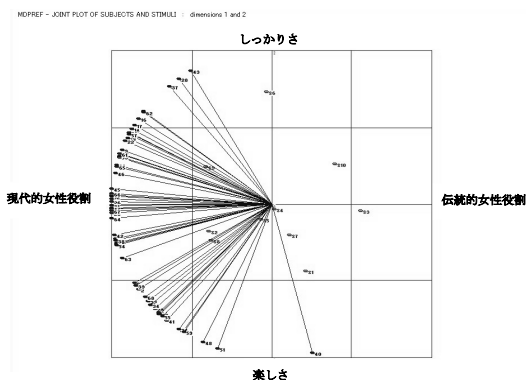


Figure 3. 調査対象者の2次元空間における布置（男性）

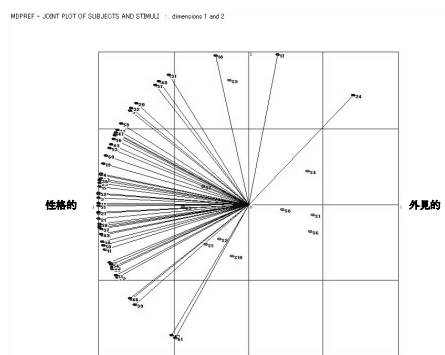


Figure 4. 調査対象者の2次元空間における布置（女性）

いる36名の男性は、グループ2に分類される。女性の場合も、上述の分け方と同じように、左上区域の調査対象者はグループ1と命名して、左下区域の調査対象者はグループ2と命名する。

Table 2は男性調査対象者の2グループの比較結果である。各段階の中で基本信頼感、自律性、生産性と同一性において有意な差異が見られた。自主性、親密性と生殖性の段階には有意な差異が見られなかった。

Table 3は女性調査対象者の2グループのS-ESDS各段階得点の比較結果である。各段階において有意な差異は見られなかった。

考察

本研究の結果から見ると、男性の方は女性より選択基準がより複雑なことが判明した。女性は“性格的 対 外見的”を主な選択基準として男性を選択するが、男性は“現代的女性役割 対 伝統的女性役割”と“楽しさ 対 しっかりさ”という2つの次元から女性を選択する。

この違いは男女青年の親密性発達における発達の程度が違う（S-ESDSの親密性得点において、女性（ $Mean=22.34$, $SD=3.84$ ）は男性（ $Mean=19.26$, $SD=2.40$ ）より高い（ $t(127)=5.52$, $p<.01$ ））からだと解釈できる。Erikson（1968）はアイデンティティの男女性差に関して生理的な違いから心理的差異について、次のように述べた。“男性的空間は、高さや互解、急速な動きや交通整理というものによって支配されており、女性的空間は、開いたままかもしくは簡単なかきねをつけただけの、平和的で、すぐにでも侵入されやすいつくりの静態的な室内によって支配されていたのである”（pp.383-384）。女性はアイデンティティの発達と親密性の発達が同時平行的で両者のずれが少ない。男性はアイデンティティの発達後に親密性の発達に移行する。即ち、男性の親密性はアイデンティティの発達を前提にしおり、アイデンティティがある程度、獲得されていないと親密性の発達が起こらないのに対して、女性の場合、アイデンティティと親密性の発達が同時平行して進

Table 2
2つのグループのS-ESDS下位尺度得点のt検定結果（男性）

	グループ1 (N=30)		グループ2 (N=36)		t値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
第I段階：基本信頼感	19.58	3.03	17.28	3.57	2.82**
第II段階：自律性	17.97	4.04	15.44	4.37	2.44*
第III段階：自主性	19.58	3.26	18.81	3.32	0.96
第IV段階：生産性	19.29	3.67	16.94	3.46	2.69**
第V段階：同一性	19.13	4.08	16.31	3.44	3.07**
第VI段階：親密性	19.52	2.38	19.03	2.46	0.82
第VII段階：生殖性	19.00	4.27	17.53	3.35	1.58

注：* $p<.05$, ** $p<.01$

Table 3
2つのグループのS-ESDS下位尺度得点のt検定結果（女性）

	グループ1 (N=30)		グループ2 (N=36)		t値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
第I段階：基本信頼感	19.33	3.04	19.03	4.51	0.30
第II段階：自律性	17.83	3.61	17.59	4.27	0.24
第III段階：自主性	18.47	3.64	18.66	3.75	-0.20
第IV段階：生産性	18.70	3.36	18.34	4.33	0.35
第V段階：同一性	19.03	3.01	18.76	4.71	0.27
第VI段階：親密性	22.77	3.74	22.03	4.06	0.72
第VII段階：生殖性	19.07	3.67	19.41	4.07	-0.34

むと考えられる。いくつかの実証的研究 (Blyth, Simmons, & Zakin, 1985; Gilligan, 1982, 1988; Miller, 1976; Noddings, 1983) はEriksonのこの理論を支持した。勿論、他の若干の研究 (Archer, 1982, 1989; Gilligan, 1979; Gilligan, Ward, Taylor & Bardige, 1988) はEriksonの見解と違って男女のアイデンティティ発達が同じであると指摘したが、男女の間に幾つかの面において発達の差異が存在することは否定していない。例えば、Archer (1989) はアイデンティティ発達の性差を検討するため、3つの次元から男女のアイデンティティ発達を比較した。その結果、男女間の有意な差異は無いが、女性が家庭の役割の形成、アイデンティティの達成において男性より早いことが明らかになった。また、他の領域の研究でも男女青年は異性との関係あるいは親密関係において違いが存在することを論証した (Camerena, Sargiani, & Petersen, 1990; Sharabany, Gershoni, & Hofman, 1981; Shulman, Laursen, Kalman, & Karpovsky, 1997)。これらの研究はみな女性の方が男性よりも親密性が高く、自我開放の程度が大きいと結論づけている。男性は女性よりも親密性の発達が遅く、青年後期においてもまだアイデンティティの形成のために探索している (Erikson, 1963, 1968; Adams & Archer, 1994; Craig-Bray, L., Adams & Dobson, 1988; Cooper & Grotevant, 1987; Youniss & Smollar, 1985など)。その故に男性の方はアイデンティティの形成を通して親密性の段階に進む過程を取ろうとするため、結果として恋愛パターン、あるいは選択基準が複雑になると考えられる。即ち恋愛行動が親密性の発達の結果ではなく、自らのアイデンティティの自信を得るための“アイデンティティのための恋愛” (大野, 1995) になると推測される。つまり、アイデンティティの自信を形成するためには、様々な女性と付き合いが求められ、そのために選択基準も複雑になると考えられる。このような現象はSanderson & Cantor (1995) の研究結果でも示唆された。

また、今回の研究において女性の方は外見より性格のことを重視していることがわかった。進化

心理学の観点からみると、女性は将来の家庭のよい雰囲気を形成して、子供にとって安心感のある生育環境をつくるためには、男性の性格の優しさが外見より最も重要だと判断するのだと考えられる (Buss, 1993)。

また、本研究の男性調査対象群において、グループ1はグループ2より“しっかりさ”を重視して、選択傾向の差異が存在していることが示された。しかも両グループの漸成発達のいくつかの段階において有意な差があることも見られた。グループ1の男性はS-ESDSの4つの段階において得点が高い。すなわち女性の“しっかりさ”という性格特性を重視している男性は、より漸成発達の各段階の形成がなされていると解釈できる。このような特徴を持っている男性はアイデンティティの発達状態が相対的に達成している人ともいえるだろう。一方、例えば顔などの女性の外的魅力や面白さといった“楽しさ”を大事にしているグループ2の男性はS-ESDSの4つの段階において得点が低い、アイデンティティの発達状態が相対的に達成していないと考えられる。この結果はSanderson & Cantor (1995, 2001) らの、アイデンティティの形成状況において得点が高いほど、親密関係において心理的コミュニケーション、性格上の開放性、互いに依頼する欲求が強くなり、相手の成熟性を重視するという結果と一致している。

アイデンティティの発達状態が相対的に達成している人は、Eriksonの漸成発達理論図のより初期の発達段階の主題においても、基本信頼感や自律性、自主性も相対に発達していると理論的に考えられる。また当然、アイデンティティの感覚としての、“私は私である”のような一貫性と連続性の感覚が強く、それ故日常的なアイデンティティの感覚としての自覚、自信、自尊心、責任感、使命感、生きがい感 (大野, 1995) をより持っていると考えられる。このような人は、親密関係においても相手の人格上の独立性を重視することができるだろう。先に、青年期の恋愛関係における、交際相手を自分を投射する鏡として自らのアイデンティティ形成を促進する傾向 (Erikson, 1968)

について述べたが、その点についても、相手の独立性ある人格に自分のアイデンティティを反射することで自分のアイデンティティの統合をより確立することができるかと推測されるだろう。その他の恋愛に関する理論からみると、人格上の相似性がより親密関係の達成を促し、満足度がより高い恋愛関係をつくりやすくなることが指摘されている (Byrne, 1971; Luo & Klohnen, 2005)。そのため、アイデンティティの形成状況が相似している人どうしが互いを選択する可能性がある。たとえば、基本信頼感が高い人は同じレベルの異性に好感を持ちやすいのである。

今後の課題

本研究は主に大学生を研究対象として実施したものである。今後もっと広い範囲からサンプリングし分析することで、より代表性がある選択基準を検討する必要がある。また、女性の選択傾向と漸成発達の各段階の発達状態との関連についても深く検討する必要がある。

さらに青年後期以後の初期成人期に入った男性の親密性の発達にはどのような特徴があるか、その段階の男性は青年期から選択基準の変化が起こるかどうか、また親密性の達成程度と選択基準との間にはどのような関連があるか、などの問題についても、課題として研究する必要がある。

引用文献

- Adams, G. R., & Archer, S. L. (1994). Identity: A precursor to intimacy. In S. L. Archer (Ed.), *Intentions for adolescent identity*. Thousand Oaks, CA: Sage. pp.193-213
- Archer, S. L. (1982). The lower age boundaries of identity development. *Child development*, **53**, 1551-1556.
- Archer, S. L. (1989). Gender differences in identity development: Issues of process, domain and timing. *Journal of Adolescence*, **12**, 117-138.
- Blyth, C., Simmons, R., & Zakin, D. (1985). Satisfaction with body image for early adolescent females: The impact of pubertal timing within different school environments. *Journal of Youth and Adolescence*, **14**, 227-236.
- Buss, D. M., & Schmitt, D. P. (1993). Sexual strategies theory: An evolutionary perspective on human mating. *Psychological review*, **100**, 204-232.
- Byrne, D. (1971). *The attraction paradigm*. New York: Academic Press.
- Camerena, P. M., Sargiani, P. A., & Petersen, A. C. (1990). Gender specific pathways to intimacy in early adolescence. *Journal of Youth and Adolescence*, **19**, 19-32.
- Campbell, L., Simpson, J. A., Kashy, D. A. & Flether, G. J. (2001). Ideal standards, the self and flexibility of ideals in close relationships. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **27**, 447-462.
- Campbell, W. K., Foster, C. A., & Finkel, E. A. (2002). Does self-love lead to love for others? A story of narcissistic game playing. *Journal of Personality and Social Psychology*, **83**, 340-354.
- Cooper, C. R., & Grotevant, H. D. (1987). Gender issues in the interface of family experience and adolescents' friendship and dating identity. *Journal of Youth and Adolescence*, **16**, 247-264.
- Cooper, M. L., & Sheldow, M. S. (2002). Seventy years of research on personality and close relationships: Substantive and methodological trends over time. *Journal of Personality*, **70**, 783-812.
- Craig-Bray, L., Adams, G. R., & Dobson, W. R. (1988). Identity formation and social relations during late adolescence. *Journal of Youth and Adolescence*, **17**, 173-187.
- Erikson, E. H. (1950, 1963). 仁科弥生 (訳) (1977). *幼児期と社会* みすず書房
- Erikson, E. H. (1958). 西平直 (訳) (2002). *青年ルター* みすず書房
- Erikson, E. H. (1968). 岩瀬庸理 (訳) (1973). *アイデンティティ——青年と危機——* 金沢文庫

- Festinger, L., Schachter, S., & Back, K. (1950). Social pressures in informal groups: *A study of human factor in housing*. Stanford: Stanford University Press.
- Fletcher, G. J. O., Simpson, J. A., Thomas, G., & Giles, L. (1999). Ideals in intimate relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **76**, 72-89.
- Fromm, E. (1956). 鈴木 晶 (訳) (1991). 愛すること ということ 紀伊国屋書店
- Gilligan, C. (1979). Woman's place in man's life cycle. *Harvard Review*, **49**, 431-446.
- Gilligan, C. (1982). *In a different voice: Women's conceptions of the self and of morality*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Gilligan, C., Ward, J. V., Taylor, J. M., & Bardige, B. (1988). *Mapping the moral domain*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Hatfield, E. & Sprecher, S. (1986). Measuring passionate love in intimate relations. *Journal of Adolescence*, **9**, 383-410.
- Hinde, R. (1997). *Relationship: A dialectical perspective*. Hove, England: Psychology Press.
- Howard, J. A., Philip, B., & Pepper, S. (1987). Social or evolutionary theories?: Some observation on preference in human mate selection. *Journal of Personality and Social Psychology*, **53**, 194-200.
- Klohn, E. C., & Mendelsohn, G. (1998). Partner selection for personality characteristic: A Couple-centered approach. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **24**, 268-278.
- Larson, R., & Graef, R. (1982). *Time alone in daily experience*. New York: Wiley-Interscience.
- Laursen, B., & Williams, V. A. (1997). Perceptions of interdependence and closeness in family and peer relations among adolescents with and without romantic partners. In S. Shulman & W. A. Collins (Eds.), *Romantic relationships in adolescence: Developmental perspectives*. San Francisco: Jossey-Bass. pp.3-20.
- Luo, S., & Klohn, E. (2005). Assortative mating and marital quality in newlyweds: A couple-centered approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, **88**, 304-326.
- Mead, G. H. (1934). *Mind, self, and society*. Chicago: University of Chicago Press.
- Noddings, N. (1983). Formal modes of knowing. In E. Eisner (Ed.), *Learning and teaching the ways of knowing*. Chicago: University of Chicago Press.
- 茂垣まどか (2006). エーリッヒ・ケストナーのアイデンティティ形成と理想視の関連についての伝記分析 日本教育心理学会第48回総会発表論文集, 210.
(Mogaki, M.)
- 三好昭子・大野 久・内島香絵・若原まどか・大野千里 (2003). Ochse & PlugのErikson and Social-Desirability Scaleの日本語短縮版 (S-ESDS) 作成の試み 立教大学心理学研究, **45**, 65-76.
(Miyoshi, A., Ono, H., Uchijima, K., Wakahara, M., & Ono, C. (2003). The development of a Simplified Version of Ochse & Plug's Erikson and Social-Desirability Scale (S-ESDS). *Rikkyo Psychological Research*, **45**, 65-76.)
- 三好昭子 (2004). 伝記資料による人格形成過程の分析——谷崎潤一郎の否定的アイデンティティ形成について—— 日本教育心理学会第46回総会発表論文集, 640.
(Miyoshi, A.)
- 三好昭子 (2006). 芥川龍之介の有能感の欠如についての伝記分析 日本教育心理学会第48回総会発表論文集, 200.
(Miyoshi, A.)
- 松井 豊・山本真理子 (1985). 異性交際の対象選択に及ぼす外見的印象と自己評価の影響 社会心理学研究, **1**, 9-14.
(Matsui, Y. & Yamamoto, M. (1985) The influence of appearance and self-esteem on choice of a dating partner. *Japanese Journal of*

- Social Psychology*, **1**, 9-14.)
- Ochse, R., & Plug, C. (1986). Cross-Cultural Investigation of the Validity of Erikson's Theory of Personality Development. *Journal of Personality and Social Psychology*, **50**, 1240-1252.
- 大野 久 (1995). 青年期の自己意識と生き方 落合良行・楠見 孝 (編) 講座生涯発達心理学 4 自己への問い直し——青年期—— 金子書房 pp.89-123.
(Ono, H.)
- 大野 久 (1996). ベートーヴェンのハイリゲンシュタットの遺書の「自我に内在する回復力」からの分析 青年心理学研究, **8**, 17-26.
(Ono, H. (1996). Power of recovery inherent in a young ego in Beethoven's HEILIGENSTÄDTER testament. *Japanese Journal of Adolescent Psychology*, **8**, 17-26.)
- 大野 久 (1998). 伝記分析の意味と有効性 青年心理学研究, **10**, 67-71.
(Ono, H. (1998). Meaning and efficacy of biography analysis : Study of typical representative. *Japanese Journal of Adolescent Psychology*, **10**, 67-71.)
- 岡太彬訓・今泉 忠 (1994). パソコン多次元尺度構成法 共立出版
(Okada, A. & Imaizumi, T.)
- 奥田秀宇 (1990). 恋愛における身体的魅力の役割 心理学評論, **33**, 373-390.
(Okuda, H.)
- 西平直喜 (1981a). 友情・恋愛の探求 大日本図書
(Nishihira, N.)
- 西平直喜 (1981b). 伝記に見る人間形成物語 1 : 幼い日々にかいた心の詩 有斐閣
(Nishihira, N.)
- 西平直喜 (1983). 青年心理学方法論 有斐閣
(Nishihira, N.)
- 西平直喜 (1990). 成人になること 東京大学出版会
(Nishihira, N.)
- 西平直喜 (1996). 生育史心理学序説——伝記研究から自分史制作へ—— 金子書房
(Nishihira, N.)
- 西平直喜 (2004). 偉い人とはどういう人か 北大路書房
(Nishihira, N.)
- Regan, P. C. (1998). What if you can't get what you want? Willingness to compromise ideal mate selection standards as a function of sex, mate value, and relationship context. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **24**, 1294-1303.
- Rubin, Z. (1973). *Liking and loving: An invitation to social psychology*. New York: Holt, Rinehart & Winston.
- Sanderson, C. A., & Cantor, N. (1995). Social dating goals in late adolescence: Implications for safer sexual activity. *Journal of Personality and Social Psychology*, **68**, 1121-1134.
- Sanderson, C. A., & Cantor, N. (2001). The association of intimacy goals and marital satisfaction: A test of four mediational hypotheses. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **27**, 1567-1577.
- Sharabany, R., Gershoni, R., & Hofman, J. A. (1981). Girlfriend, boyfriend: Age and sex differences in intimate friendship. *Developmental Psychology*, **17**, 800-808.
- Shulman, S., Laursen, B., Kalman, Z., & Karpovsky, S. (1997). Adolescent intimacy: Revisited. *Journal of Youth and Adolescence*, **26**, 597-617.
- Simpson, J. A. & Gangestad, S. W. (1992). Sociosexuality and romantic partner choice. *Journal of Personality*, **60**, 31-51.
- Simpson, J. A. & Harris, B. A. (1994). *Interpersonal attraction: Perspectives on close relationships*. Needham Heights MAUS.
- Sternberg, R. J., & Barnes, M. L. (1988). *The psychology of love*. New Haven: Yale University Press.
- Tesch, S. A., & Whitbourne, S. K. (1982). Intimacy and identity status in young adults. *Journal of Personality and Social Psychology*, **43**, 1041-

1051.

Terman, L. M. (1938). *Psychological factors in marital happiness*. New York: McGraw-Hill.

内島香絵 (2004). R. P. ファインマンの自己実現傾向についての伝記分析 日本教育心理学会第46回総会発表論文集, 634. (Uchijima, K.)

Walster, E., Aronson, E., Abrahams, D., & Rottman, L. (1996). Importance of physical attractiveness in dating behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, **4**, 508-516.

Winch, R. F. (1958). *Mate selection*. New York: Harper.

Youniss, J., & Smollar, J. (1985). *Adolescent rela-*

tions with mothers, fathers, and friends. Chicago: University of Chicago Press.

Zayas, V., & Shoda, Y. (2007). Predicting preference for dating partners from past experiences for psychological abuse: Identifying the psychological ingredients of situations. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **33**, 123-138.

Zimmer-Gembeck, M. J., & Petherick, J. (2006). Intimacy dating goals and relationship satisfaction during adolescence and emerging adulthood: Identity formation, age and sex as moderators. *International Journal of Behavioral Development*, **30**, 167-177.

——2008. 9. 29 受稿, 2009. 1. 19 受理——